第十五講　小説その４　現代と回想

［１］私は掘割を見下ろしていた。もう秋の初めの頃のように厭な臭いが鼻を突くこともなかったが、水はやはり澱(よど)んだまま流れなかった。そこに種々雑多なものがゆらゆらと揺れていた。包装紙や、木切れや、藁や、ブリキの罐や、土瓶のかけらや、その他いろいろのものが。濁った水面には油が浮いてぎらぎらし、乏しい日光を反射していた。

［２］私は昔ギリシャ神話を読んで、うろ覚えに忘却の河というのがあったのを覚えている。三途の河のようなものだろう、死者がそこを渡り、その水を飲み、生きていた頃の記憶をすべて忘れ去ると言われているものだ。しかし私にとって、忘却の河とはこの掘割のように流れないもの、澱んだもの、腐って行くもの、あらゆるがらくたを浮かべているものの方が、よりふさわしいような気がする。この水は、水そのものが死んでいるのだ。そして忘却とはそれ自体少しずつ死んで行くことではないだろうか。あらゆる過去のがらくたをその上に浮かべ、やがてそれらが風に吹かれ雨に打たれ、それら自身の重味に耐えかねて沈んで行くことではないだろうか。

［３］私はその時、彼女の生家を訪ねて行った。実にはるばると、日本海のほとりまでその住所を頼りに探しに行った。その家で応接に出たのは、眼を病んでいるらしくて赤く充血した眼をした婦人だった。それが彼女の母親であることは、向こうが、娘のことですか、と言うまでは分からなかった。それほど見すぼらしくやつれてはいたが、どこか彼女に似ているところがないわけではなかった。娘のことですか、と言って、訛りの多い方言でぽつりと答えた。娘は死にました。私は事情が分かるまで押し問答[A]を繰り返したが、その間じゅうこの婦人は難しい方言と、赤くただれたその眼とで私をおびやかした。私の話を聞こうともせず、私が何者であるのかを知ろうともせずに、娘は身籠ったのを恥じて淵から身を投げて死んだ、と言い続けた。その赤くただれた眼は、風雪のせいだったのだろうか、娘を悼む涙のせいだったのだろうか。婦人は私を門口(かどぐち)から追い返した。線香を上げさせてもくれなかった。この母親自身も恥じていたのだ。

［４］私はかつて彼女の口から聞いたことのある断崖へ行ってみた。私は夢遊病者のように歩いていて、いつ、どういうふうにそこへ達したのか覚えていない。また、そこの風景も何ひとつ覚えていない。確かに下を見下ろすと眼のくらめくような

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

恐ろしい場所だったような気がする。そして更に私はふらふらと歩いて、いつしか海岸に出ていた。秋の終わりで、寒い風がびゅうびゅうと吹きつけていたが、私は少しも寒いとは感じなかった。

[5] そこが賽の河原だった。洞窟もあった。あたりには人一人いず、海には舟一艘見えなかった。私は河原の岩を踏んでその洞窟にはいって行った。白い涎掛けをつけたお地蔵様があり、小さな石仏があり、その前や横には幾箇所にも小さな石が積み重ねられていた。蝋涙のこびりついた蝋燭の跡があり、子供の形見らしい襦袢や着物などがあった。もっと色々なものがあったのかもしれない。しかしこの仄暗い洞窟の中は、打ち寄せる浪の響きが凄まじく木霊して、ぞっとするような妖気を含んでいた。子供たちの多くの霊が、生き返らせてよ、生き返らせてよ、と叫んでいるような気がした。私はそこにしゃがみ、小石を取って、重ねてある上に一つ載せた。また一つ載せた。その塔はぐらぐらし、あっというまに崩れた。私はまた、必死の注意をこめて、一つずつ小石を積み重ねて行った。それが魂の、死んだ魂への、何等かの救いになるものだろうか。いや私は、私自身への救いのつもりで、この難しい作業を続けていたのだ。私はそれを終えると、最後に手にあった石をポケットに入れ、逃れるようにそこをあとにした。その洞窟を、その賽の河原を、そのさみしい彼女の故郷の村を、B最も恐ろしいもののようにあとにした。

[6] 私は手摺りにもたれて、長い間掘割の濁った水を眺めていた。美しい大きな眼をしていた彼女、赤くただれた眼をしていたその母親、鬚だらけの顔を微笑させていた戦友、生きながら死顔をしていたその若い妻、私は幾つもの顔を思い出した。戦後パージ(注)になって死んだ父、そのあとを追って老け込んだ顔に涙を浮かべながら死んだ母、幼い頃のもう記憶がさだかではない実の両親、同胞たち、そして生まれると間もなく、名前もつけられずに死んでしまった私の子供。そして彼女と共に、ついに命というものを天から授かることもなくて死んだもう一人の私の子供。その顔を私は決して、決して、知ることはないのである。

[7] 私は立ち上がり、着て来たオーバーのポケットを探って小さな石を一つ取り出した。それは私が賽の河原から拾って来て、今まで大事に保存して来たものだ。妻は恐らく気がついたこともなかっただろうが、それは私にとって、彼女と彼女の生むべきはずだった子供との唯一の形見だった。その小さな石には、私が忘れようと思い、忘れてはならないと思い、しかも私がもう何年も、いや何十年も、忘れたままになっていた無量の想いが籠められていた。その石は私の罪であり、私の恥であ

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

り、失われた私の誠意であり、惨めな私の生のしるしだった。石は冷たく、日本海の潮の響きを、返らない後悔のようにその中に隠していた。

［8］　私は再び窓へ行き、その石をじっと掌の中であたためてから、下の掘割の中へ投げた。ゆるやかな波紋が、そこに浮かんでいるがらくたを、近いものは大きく、遠いものはかすかに揺るがせながら、しかし、いつのまにかその輪を広げて、やがて消えて行った。

（福永武彦『忘却の河』）

（注）パージ――ここでは、太平洋戦争終了直後、戦争指導者や協力者と見られた人々が、公職や特定の会社、報道機関、教職などから追放されたこと。

問１　傍線部Ａの語句の意味として最も適当なものを、次のうちから一つ選べ。

①　相手を黙らせ一方的に主張すること
②　互いに体を押し合って言い争うこと
③　交互に質問し互いに答え合うこと
④　休む間も無く問答を続けること
⑤　互いにかみあわないまま言い合うこと

問２　本文の［1］～［8］の段落の中で、「私」が回想している場面が描かれている段落はどれか。その組合せとして最も適当なものを、次のうちから一つ選べ。

①　［1］・［2］・［8］
②　［2］・［3］・［6］
③　［3］・［4］・［5］
④　［4］・［5］
⑤　［6］・［7］

問３　本文の［3］の段落における「母親」の態度の説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選べ。

①　この「母親」は、娘の死を悼むあまりに、娘の知り合いである「私」を家に入れることを、親として恥ずべきこととし

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

て拒絶し、線香すらも上げさせないのである。

② この「母親」は、娘が身籠って自殺したことを自分に恥をかかせたとして、娘を訪ねて来た「私」に対して娘のことを話したがらず、「私」の弔いも拒絶しているのである。

③ この「母親」は、訪ねて来た娘の知り合いの「私」に、身を投げて死んだ娘のことを話すと、自分の恥を責められるので、話したがらず家にも入れないのである。

④ この「母親」は、娘が身を恥じて死んだのを、単に娘だけのこととしないで自らも恥じ、「私」の話を聞こうともせず、「私」の弔いすらも拒否しているのである。

⑤ この「母親」は、娘を自殺させてしまったことを、はるばる娘を訪ねて来た「私」に恥じて、家にも入れず、「私」に弔ってもらうことも遠慮しているのである。

問４　傍線部Ｂ「最も恐ろしいもののようにあとにした。」とあるが、それは「私」のどんな様子を表しているか。その説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選べ。

① 賽の河原でわが子の魂を救おうと塔をつくり、その成果として小石を一つポケットに入れた「私」が、この地から一刻も早く一歩でも遠く離れたがっている様子を表している。

② 賽の河原で塔をつくったくらいで救われるとは思えない「私」が、自分の罪をまざまざと感じさせられ、その慄(おのの)きに襲われている様子を表している。

③ 賽の河原がいかにさみしいものであったかを身をもって知った「私」が、死者たちへの切ない思いを懸命に振り払おうとしている様子を表している。

④ 賽の河原のぞっとする妖気のなかで、子供たちの霊の叫びを聞いた「私」が、心の底から震え上がって、まだ心身ともにそれから脱しきれないままでいる様子を表している。

⑤ 賽の河原で自分の罪の救いとして難しい作業を終えた「私」が、罪から救済された思いを失うまいとしている様子を表している。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問５　傍線部Ｃ「私は再び窓へ行き、その石を……下の掘割の中へ投げた。」とあるが、それは「私」にとってどのようなことを意味しているか。その説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選べ。

①　かつて自分の子を宿した女性を死に追いやったことに激しい悔恨を覚えている「私」は、生まれるはずであった子供の唯一の形見である「小さな石」を掌であたためてから掘割に投げ込むことで、そこに深い鎮魂の思いを託しているのである。

②　自身の過去を振り返る時、犯してきた様々の罪のみが思い返される「私」は、それら幾つもの罪のしるしである「小さな石」を掘割に投げ入れることによって、そうした過去の一切から目をそむけ、新たな心で生き直そうと決心しているのである。

③　これまで数々の死に立ち会ってきた「私」にとり、「小さな石」とはそれら死んでいった人々への自己の不実さを常に突きつけるものであったが、それを掘割の底に沈めることで、「私」は自責の念を心の深部に抱き続けようと決意しているのである。

④　「私」にとって過去とは多くの人々との死別や生別を意味するものであり、「小さな石」はそうした惨めな生のしるしに他ならなかったが、それを掘割に投げ放つことのうちに、「私」は幸福な人生の新たな始まりを予感しているのである。

⑤　深い罪の意識の中で過去につきまとわれている「私」にとって、「小さな石」とはそのような過去を象徴するものであり、それを掘割に投げすてることに、「私」はそうした過去に対する拘泥から解き放たれることへの願いをこめているのである。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第十五講　知識モノ解説

文学史・人物解説

●福永武彦＝ふくなが　たけひこ（一九一八～一九七九年）『忘却の河』←芥川賞＋センター試験
●池澤夏樹＝いけざわ　なつき（一九四五～）『スティル・ライフ』←芥川賞＋センター試験
cf 親子でセンター試験……太宰治と津島佑子

語句

三途の川＝さんずのかわ↓死後、冥土へ行く途中で渡るとされる川
cf 彼岸＝ひがん↓あの世・迷いから脱した悟りの境地
此岸＝しがん↓この世・悩みや迷いに満ちた現実世界
賽の河原＝さいのかわら↓親に先立って死んだ子供がいくとされる、三途の川の河原

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

復習問題　第十五講

次の傍線部にあたる漢字を、次の各選択肢から選びなさい。

（ア）北国のフウセツに耐える　①説　②節　③刹　④雪　⑤切

（イ）子供のカタミの品です　①見　②身　③実　④味　⑤未

（ウ）客をオウセツ間に通す　①往　②応　③奥　④墺　⑤押

（エ）仏壇にセンコウをあげる　①講　②鉱　③幸　④香　⑤効

（オ）大きなハモンが広がる　①門　②紋　③文　④聞　⑤悶

次の語句の意味として最も適当なものを、次の各選択肢から選びなさい。

（カ）うろ覚え

①棒暗記した記憶　②不確かな記憶　③間接的な記憶

④誤りの多い記憶　⑤無意識の記憶

（キ）無量の想い

①数少ない想い　②正体不明の想い　③とるに足りない想い

④はかりしれない想い　⑤大雑把な想い

（ク）悼む

①思いやりを示す　②落ち度を指摘する　③人の死を嘆き悲しむ

④板挟みになる　⑤失敗を謝罪する

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第十五講　小説その4　現代と回想

《本文の対比構造》

主役

「私」・現代（現在位置）

＝掘割＝「忘却の河」

＝「私」の無量の想い、過去を流したいが流れない河

主な対比

比較相手

回想シーン＝日本海

＝身籠ったことを恥じて死んだ「彼女」とその母親／死者への鎮魂

小さな対比

脇役

誠意・自責の念を抱き続ける

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

《解説》

問１《語句説明・選択肢》

「彼女」を訪ねて行ったら、「死にました」とその母親に言われ、事情がよく分からないという場面です。二人の対話もかみあわず、そのため「押し問答」になります。つまりうまくいかない意思疎通、バット・コミュニケーションなのです。⑤が正解。①は「一方的」でそもそもコミュニケーションではありません。②では「おしくらまんじゅう」ですよ。「寒いですな。体でも押し合いませんか」って和気藹藹（わきあいあい）か！③は普通のコミュニケーションです。④は「休む間も無く」が×です。「押し」にそのような意味はありません。

問２《全文理解・選択肢》

今回のストーリー展開のベース、すなわち、そこからスタートしてそこへと帰っていくホームベースは「掘割」です。これが「現在位置」でもあります。一方、そこではない「日本海」の海辺の町でのエピソードが「回想シーン」となります。したがって［3］［4］［5］です。［2］のギリシャ神話のエピソードは一瞬のことで、本格的な回想シーンとは言えません。

問３《内容説明・選択肢》

「回想シーン」に出てくる、「彼女」の母親の説明です。「恥じる」がキーワードですが、「彼女」が身籠ったことを「恥じた」のに加え、この母親も「恥じていた」というように二人ともひとつのグループとしてセットです。それを分断し、一面的・部分的に説明している①②③⑤は、ことごとく同じ間違いです。同一性分断の誤りといっても、部分的指摘の誤りと呼んでもOKです。また「私が何者であるのかも知ろうともせず」と本文にありますから、この点でも「娘の知り合い」とした①③は記述に反する誤りです。（なぜ、「恥じたのか」の説明は本文には直接明記がなく、設問にもなっていませんが、以下のように推測されます。正式の婚姻関係にないのに、つまり不倫関係なのに妊娠したこと、また一時代前の話ということもあり、世間の目、村落共同体の目というものがあったのではないでしょうか）

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問４《傍線部説明・選択肢》

通常、賽の河原で石を積むのは、死者の魂を弔うためですが、「私」はそうではなく、「自分自身の救いのつもり」です。イヤな主人公だなと思ったかもしれませんが、主人公に共感できたから得点がいい、共感できなかったから得点がわるいというようなことにならないための練習と考えてくださいね。ただし、「逃れるようにそこをあとにした」とあるように、自己救済は成功したわけではありません。最終段落でも、賽の河原の石を、掘割に投げ入れることで、同じ自己救済を図ろうとしていることからも分かります。したがって②が正解です。すると①の「成果」、⑤の「救済された」が×です。これでは意気揚々と帰還ということになり、話もここで終わってしまいます。記述に反する誤りです。③は「死者」のための祈りになり、対比混乱の誤りです。④は「霊の叫びを聞いた」が×です。本文では「叫んでいるような気がした」との心理描写です。これぞ物理的スリカエの典型です。あるいは比喩を文字通りに解釈した誤りと呼んでもよいです。ともあれホントに聞こえたら、心霊スポットだよ。そりゃ怖い！

問５《傍線部説明・選択肢》

賽の河原の場面と同様に、自己救済の願いをこめて石を掘割に投げ入れます。しかし、それはスッキリとは流れていかない、澱(よど)んだままの「忘却の河」なのです。したがって、⑤が正解です。①は「鎮魂」が×です。これでは、死んだ魂のためということになり、自己救済に反します。対比混乱の誤りです。②は「罪のみ」が不当な限定判断です。「無量の想い」のはずです。③は「自責の念を〜抱き続けよう」が×です。石を掘割に投げてしまう行為と矛盾します。これも対比混乱の誤りです。④は「幸福な人生の新たな始まり」が×です。都合よすぎですよね。そんな簡単に過去の拘泥(こうでい)からまぬかれません。記述に反する誤りです。そのことを本人も分かっているのです。だから「忘却の河」はこの掘割なのです。

模範解答

問１＝⑤　問２＝③　問３＝④　問４＝②　問５＝⑤

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

復習問題解答　第十五講

（ア）④　（イ）①　（ウ）②　（エ）④　（オ）②
（カ）②　（キ）④　（ク）③

解答漢字一覧

（ア）風雪　（イ）形見　（ウ）応接　（エ）線香　（オ）波紋

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。